

彼は國民學校の教師を以て自己の使命と信じ、毫も他に求むる所がなかつた。大學教育を受けないで、教育界に彼の如き大きな足跡を印したものは、ベスタロッチ以外多く見ない所である。

* ヴーゲル Karl Mager (1810—1858) は一八四三年までは熱心なヘーゲル學徒であつたが、この年を境としてヘーゲルに於ける「國家の全能」に反對し、學校の「自治的經營」について主張した。この點でも彼はデルベルトに大きな影響を及ぼしてゐる。教育上では「教育的教授」について力説し、教材の分析的、綜合的及び發生的取扱について詳説するなど、ヘルベルトの見解に頗る近いものがある。一八四〇年雑誌「教育評論」(Pädagogische Revue) を發行し、一八四八年まで之を主宰したが、この雑誌は、一時、教育雜誌中最も重んぜられてゐた。教育上の著述「ドイツ市民學校」(Deutsche Bürgerschule) (1840) はドイツの實科教育に一新紀元を畫するものとして著名である。

デルベルトの著書、論文等は、死後十二卷の全集に纏められ、女婿ローデンによつて發刊せられた。中にも、其の第二卷に於ける一般教授學と、第七、八、九卷に輯められてゐる學校經營に關する論策は彼の教育説を知るに適する。彼はヘルベルト派に屬しながらも、其の態度は極めて慎重であり、種々の點に於て補正を加へ、之を學校教育に適用するに主力を注いだ。特にヘルベルト及び其の一派が學習の過程について説きながら、練習過程にさまで注意を拂はなかつたこと、及び學校の制度及び經營に關する研究を缺けることに多大の不滿を表した。教授につきてはツィルレル一派の五段説に對して、直觀(導入、直觀)、思考(比較、總括)、應用の三段を立て、教材相互の關聯を重視しながらも、ツィルレルの中心統合及び文化史的段階説に反對して宗教教授を凡ての教授の中

心たらしめた。教科論に於ては、教科を一、事物教授(自然科、人間科、宗教)、二、言語教授(讀方、書方、話方)、及び三、形式教授(算術、圖畫、唱歌)に三分した。特に、歴史の外に「社會科」の目を立て、其の著「社會科、歴史教授の必然の補充」(一八九一年)に於て、歴史が過去の人間生活を取扱ふに對し、社會科は現代の人間諸關係に就て知らしめる、従つて後者は前者の理解に對する不可缺の基礎であるとの理由で、歴史の教授を社會科で以て補ふべしとせるはヘルベルト一派の教育學に一步を進めたものである。彼は又注入教授の弊を痛撃し、之を「學ばれた材料を學び方如何に關係なく直ちに精神力と考へ、修得せる材料の唯の分量を、其のまゝ、知的、道德的陶冶の標準となす皮相の教育的見解である。」として、「教授上の唯物主義」——この語デルベルトに始まる——の名に之を貶し、他方、學ばれた材料を反復銘記せしむべきことを力説した。曰く「教授に於て記憶を忽せにするは愚人である。しかし思考を忽せにするは二重の愚人である。加ふるに反復に於て論理的記憶の方法を利用しないものは三重の愚人である。」と。

學校の經營に關して、デルベルトは父兄の、教育に對する權利を確認し、「學校自治體」(Schul-Gemeinde)、即ち兒童の共同の教育の爲に、父兄の權利と良心の自由に基づいて組織せられた自治體を「正しき、健全な、そして自由で、満足すべき學校經營の基礎」であるとし、國家又は教會が學校教育に對し全權を有する從來の制度に反對した。學校が國家及び教會の指導監督の下にあるこ

とは固より認められねばならぬが、兒童の教育に最も關心を有するは父兄であるから、公けの機關と相並んで父兄も學校の經營に關與するは當然であり、各學校は當面の事務を處理する爲に二三の父兄の代表者、町村、教會、教員等からの各一人の代表者によつて委員會を組織すべく、重要な事件については、學校の區域の大きさに従つて六人乃至十二人の父兄が參與すべきであるとした。次ぎに學校が宗派的であるべきか（宗派學校）、將た宗派如何に關せず共に教育すべきか（新舊共同學校）につきては、前者を選んだが、しかし父兄が後者、若しくは全く宗教から離れた學校（世俗學校）を希望する場合には、宗派學校への入學を強要すべきでないとし、三種の學校に夫れ夫れ自由の權利を保有せしめた。學校の經營に關する以上の見解はマーゲルに負ふ所多く、一面からはマーゲルの思想を實際的ならしめたものとも稱すべく、ディースルヴェークはデルベルトを研究しないでは何人も學校の經營について語る資格はない、とまで賞揚してゐる。

尙特筆すべきは教育に於ける社會的見地である。彼は當時の個人主義及び形式主義に反對し、教育の任務は個人の多方的な陶冶ではなくて人間社會に存する文化財の存續（實質主義）にある、個人は教育によつて全體としての人間社會に導き入れらるべきである（社會主義）、社會は客觀的な現實體であり、何者も（教育者も、學校も）其の作用を防止するを得ない、と言ふ。しかしこの主張が、後、次第に弱まつたのは返す返すも惜しまれる。リスマンによると如上の社會的見地はマーゲ

ルの影響によるものであり、後、弱まつたのはヘルバルト・ツイルレル派の個人主義に一層近づいた（特に一八六〇年代に入つてから）爲である。

デルベルトは其の一生を國民學校に捧げた。彼は教授の技術に長けてゐた。何よりも兒童に對する愛に燃えてゐた。已に師範學校時代、校長ツァーンの夫人は若いデルベルトにペスタロッチ的な心情を見出したと言はれてゐる。のみならず現狀に満足しないで、より高いものを求めて止まない「あこがれの人」であつた。教職を退く際に述べた次ぎの一語は彼の抱負を知るに足るものがある。曰く「余は國民學校の教師たらうと欲した。夫れ以上の、又は以下の何者でもなく。近頃、度々、他の職務に轉ずる機會が與へられたが、最初に選んだ道に、私を保護し、且早くに我々の職業の美しい方面に私の眼を開かせ給ふたことを神に謝する。キリストの教の、及び教育の目的の方面から見て、國民學校は一切の高等學校——如何に高からうと——と同格であり、この目的に對する手段の方面では高等の學校にまさつてゐる。のみならず、高等學校の専門の教師の活動が教育の一方面に限られてゐるに對し、國民學校の教師はこの段階（國民學校）に於ける全教科、全生徒及び全陶冶に與る。この點に於て國民學校は、少くとも教授の術に於ては、眞の教育大學である。……」と。

三 ペスタロッチ主義と國民學校教育の發達—特にハルニツシュと
 デイーステルヴェーク

一 十九世紀前半に於ける國民學校教育の發達は、主として、ペスタロッチ及び直接又は間接に彼の影響を受けた人々の力に俟つ。しかしペスタロッチには例へばヘルバルト派といつた如き意味での「派」は存しなかつた。即ち一定の立場を固守し、多少なりとも他に對抗するとの意味での「ペスタロッチ派」なるものは存しなかつた。これが理由については已に述べて置いた(本章第一節)だからペスタロッチ派なる名稱を許すにしても夫れはかなり限定された意味に於てであらねばならぬ。そしてかやうな意味でペスタロッチ派に數へられる人々として、先づ直接彼の下に學び、彼の思想を國民學校に實施せる一群の教育家が擧げられ、スイスのクリュージ Hermann Krüsi (1775—1844) 及びラムザウエル Johannes Ramsauer (1790—1818)、ドイツのチュルク Wilhelm von Türk (1774—1846) 等之に屬する、この中クリュージとラムザウエルは一八〇〇年ブルグドルフに、チュルクは同八年イフェルテンに赴き、爾來長くペスタロッチの下に教師となり、後、彼の教育法を各、其の郷國に擴めた。この外ペスタロッチの教育法をドイツに移入した實際教育家として特に注目すべきはツェルレル Karl August Zeller (1771—1840) とプランン Johann Ernst Planmann (1771—1835) である。ツェル

レルは一八〇三年ブルグドルフに赴きペスタロッチの教育法を研究し、後、或は自ら學校を起し、或は視學官となり、或はプロシヤ政府の顧問となり學制の改革に従事するなど多方面に活動した。殊にケーニヒスベルヒの師範學校長時代、ペスタロッチ教育法を熱心に宣傳し、國民學校教育の發展に寄與する所大であつた。プラマン亦一八〇三年大凡三個月、ブルグドルフにペスタロッチの教育法を研究し、一八〇五年ベルリンにペスタロッチ主義に基づける學校を開き(この學校は一八三〇年迄存続した)、一八一二年再びペスタロッチを訪ひ、教育の方法の改善に努力した。加ふるにヤーン、ハンニツシュ、フリーゼンを始め、有力な教師の協力せるあり、彼の學校はプロシヤに於けるペスタロッチ運動の中心となり、一八〇九年以來政府は年々二人の教師を、スイスに送る代りに、彼の下に送つてペスタロッチの教育法を學ばしめ、且一八一七年以來多額の補助金を支出した。

*クリュージの子小クリュージ Hermann Krüsi Jr. (1817—1938) は一八六二年以來、二十五年間、米國に於けるペスタロッチ運動の中心であつたオスウィーゴの師範學校に奉職し、オスウィーゴ運動の主動者となつた。我國にペスタロッチの思想を傳へた高嶺秀夫は直接に彼に師事した。

以上の人々が實際教育家であつたに對し、理論と實際の兩面に於て國民學校の教育を發展せしめた教育者として特にハルニツシュとデイーステルヴェークが擧げられる。共に自らペスタロッチの眞の精神を繼ぐものと確信し、一般からもペスタロッチ派を以て目せられてゐる。しかし「彼等の

教育學の根本特質は決してベスタロッチに基因せるものでない。兩者の發展はベスタロッチに始まつたのではなく、却つて他の場所、特に汎愛派の教授の原則と形式、及び問答法、中にもロヒウヤやディンテルの問答法に起原する。」とリスマンは言ふ。そしてリスマンによればこの長い間の教育史に於ける誤謬（即ち二者がベスタロッチに基づくもの）を始めて指摘したのはザルヴェルクである。

* ディンテル Gustav Friedrich Dinter (1760—1831) は教師として教育家として世人から大なる尊敬を受けた。一七九七年から十年間ドレスデンの師範學校長であり、一八一六年、五十六歳で、ツェルレルの後繼者としてケイニヒスベルヒの視學官に聘せられ、東プロシヤの教育を改革した。彼は教授上最もソクラテスの問答法を重んじ、始は問答法を輕んじたベスタロッチに極力反對したが、次第に其の下級生への適用の困難を認め、「ベスタロッチは下級の王者、ソクラテスは上級の王者である。」とベスタロッチに一定の位置を與へた。即ち下級ではベスタロッチの直觀的方法に、上級ではソクラテスの問答法によるべきことを認めた。この問答法による悟性の陶冶を重視する點で、彼はロヒウヤなどと等しく、啓蒙的精神を代表する。

同じくベスタロッチの精神を自らの精神とし、其の眞の後繼者を以て自任しつゝも、ハルニツシユとディーステルヴェークとの間にはかなりの對立があり、或程度反目してすらゐた。ディーステルヴェークの教育學は個人主義的であり、教育の目的は個人の性格の陶冶に存した。そして目的の或やうな規定に對應して、教授に於ても形式的な方面、即ち生徒の精神的能力の發展を重んじ、精神に方向を與へるものとしての内容は第二位に置かれ、寧ろ教授の主要目的（形式的陶冶）の達成

に與るかぎりに於て認められた。彼は徹頭徹尾合理主義の立場にある。之に對し、ハルニツシユに於ては個人は單なる個人以上のものであつた。言ひかへれば個人は全體の一員として、全體に於て、全體の爲に生活するの使命を有する。従つて教育の目的は個人の性格陶冶其のものではなくて、却つて個人を社會に於ける有力な一員に育成するに存し、従つて又、教授に於ても能力の發展（形式的）と之に方向を與へる内容（實質的）との兩面に同じ注意が拂はれた。尙又かやうな對立からして、前者では教育の方法中、教授が前景に立つに對し、後者では社會的生活に重要な位置が附與せられる。ディーステルヴェークの「學校は、本質上、教授によつてのみ教育する。」との主張に對し、ハルニツシユは如此は「悪い時代精神によつて呼び起された一つの錯誤であり」、「教育は唯生活其の者によつて與へられるので、教授によつて教育しようとするのは馬鹿げたことである。」と反駁する。そして彼は、若し多くの生徒が、教師の指導による正しい組織の下に社會的に結合するならば、夫れは「教授よりも一層有力に本來の教育に作用する。……學校の各員（生徒）は社會の一員であり、各員は學校に於て全體にまで導き入れられねばならぬ。」と説くのである。その他、宗教問題に於ても、宗教と學校との關係に關しても兩者の意見には著しい懸隔が存し、ハルニツシユ自身、この對立を「ベスタロッチ派の分裂」と稱したほどである。さらば進んで、尙稍詳細な消息を窺ふことにしよう。

二 ハルニツシユ Christian Wilhelm Harnisch (1787—1864) はザルツヴェデルのギムナジウムを経て一八〇六年ハレル大學に入つたが業半ばにして同大學はナポレオンの爲に閉鎖せられた。祖國の危機が如何に彼を動かしたかは、其の「自敘傳」の一節で「十二日間で私は全く異つた人になつた……前とは全く異つた思想と感情を有するに至つた。祖國の危難は私に身近かなものになつた。否、私の心臓を衝いた。祖國が異國に支配せられるといふことは私の心臓への深い傷であつた。」といへるによつても想像せられる。そしてこの祖國愛は爾後彼の全活動、全生活を貫く大きな筋絲となつた。平和恢復後、フランクフルト・アム・オーデルの大學で研學を続け、其の間ベスタロッチの精神によるヴァイシツヒの學舎を訪ね十五週間其の教育法を視察した。大學卒業後一時家庭教師となつたが、一八〇九年、プロシヤ政府よりプラマンの學校に送らるゝ二人の教師の一人として選ばれ、同校で親しくベスタロッチの方法に従つて生徒を教授し、傍ら大學に於けるフィヒテやシュライエルマツヘルの講筵に列し、又自然科学について研究した。そして祖國再興の第一の道はベスタロッチの精神による青年の教育に存するとの決意を新たにした。一八一二年處女作「ドイツ國民學校—ベスタロッチの根本原則を特に顧慮せる。」が公にせらるゝや、政府の認むる所となり、當時ドレスラウに新設せられた新教師範學校の教頭（事實上では校長）に補せられた。一八一三年自由戦争に際し出陣しようとしたが、彼の出陣は「彼一人が職を離れることではなく、戦争に際し、

民族の救済と維持の爲に、現在に於てよりよき未來を内面から準備する爲に、青年の教育によつて成されねばならぬ一切から離れることである。」との理由で官廳の許可を得なかつた。如何に政府が彼の教育活動を高く評價したかは知られる。彼が一八一五年ドレスラウに設けた體操場も一時ベルリンのヤーンの體操場よりも盛況を呈した。しかし間もなく反動時代は來つた。あまりに煽動的であるとの誤解の下に體操場は閉鎖せられ、剩へ一八二二年突如としてヴァイセンフェルスの師範學校に轉任を命ぜられた。こゝで彼は多くの秀でた教師と協力しつゝ、しかも多方面の反對を押し切つて大なる成績を収め、ヴァイセンフェルスは第二のイフェルテンとして教育者の來り學ぶもの絶えなかつた。三十五歳でヴァイセンフェルスに轉じ、一八四二年五十五歳で同校を辭するに至るまでの二十年間は彼の生活の最も光輝ある時代であつた。彼の辭職は一つには一八四一年の法令で政府が教員養成に對する極めて冷淡な態度を示したによるのであるが、一つには宗教家とならうとの熱情が年と共に加はつた爲である。辭職後一八六一年に至る大凡二十年間マグテブルクの近傍エルバイの田舎牧師として平和の生活を送つた。教育上の著述中、主著と目せられるのは「ドイツ國民學校組織綱要」„Handbuch für das deutsche Volksschulwesen“ (1830) で、これは一八一二年の「ドイツ國民學校」の内容を一層擴充せるものである。

ベスタロッチとの關係につき、ハルニツシユ自身次ぎの如くに述べてゐる。「余がベスタロッチ

チ學徒であるか否かの問に對し、余は斷乎として然りとも否とも答へ得る。若しペスタロッチ的な形式……で以て未來の救済を期待する人々をペスタロッチの徒とするならば余は否と答へる。若し又記憶や無内容な悟性の練習ではなくて、全人の全面的な陶冶をペスタロッチ的な努力の目的とし、この目的を達する方法を愛に見出す教育者をペスタロッチの徒と解するならば余は然りと答へる。」と。即ち彼はペスタロッチの基本陶冶、特に門下生達によつて形式化せられた基本陶冶に反對し——彼が基本陶冶の問題を深く研究したか否かは別問題として——、其の教育目的及び愛の教育を自らの教育精神としようとしたのである。特に教育の社會的方面に於て兩者は同じ地盤に立つてゐる。ハルニツシユは社會に存する文化財の傳達を社會的教育の最も重要な任務と考へる。彼はペスタロッチに倣つて「凡ての兒童は人間である、従つて教育の根本原則は人間の根源的な本質から導かれねばならぬ。」といふ。しかし正しき教育は又「生徒を、三つの主要な生活圏、即ち家庭、國家及び教會に對して同様に教育しなければならぬ。」「教材は精神力を陶冶する爲の手段であるが、しかし夫れは又夫れ自身價值を有し、人の環境に對する關係から、其の個性的な地位からして採擇せられねばならぬ。」かくて彼は、教授に際しては、生徒が一定の民族、一定の國家、一定の地方に屬することに絶えず注意し、いつでも地方の特質、民族の本質、國家の組織と密接な關係を保持すべく、「學校は決して多くの教材が教へられる爲にのみ存するのではなく、却つて青年の共同

生活に於て公共の福祉に對する見識を育成する爲に存する。」と説く。以上によつて明かな如く、ハルニツシユは個人を單に個人としてでなく、同時に社會の一員と見、教育の任務は個人の完成に盡くるものではなく、何よりも先づ個人の屬する各般の社會の要求に應ずべきであるとする。中にも祖國の要求は先頭に位する。彼は實に「新しい國民學校の組織は根本的に政治的性質のものである。」とすら語るのである。「彼によつて國民學校の教育は國民的及び民族的な方向を採り、之に獨有な任務が與へられ、單に高等な學校教育の萎びた挿木と見られないやうになつた。」(リスマン)。

ハルニツシユは一切の教授を環境の生活に關係せしめ、空虚な形式的練習に反對する。かくて宗教教授は空想的な世界宗教の傳達ではなくて現に存する教會の教へと生活に結合し、國語と郷土科(郷土的世界科)は國民學校の主要な教科となり、體操と唱歌も社會的感情を起し、祖國的情操を促進するものとして重視せられる。算術は「死んだ數の取扱ひ」即ち「抽象的な數による能力の發展」よりも生活への應用を重んじて、理論と應用を結合し、幾何でも同じく概念や命題からでなく、規則的な根本形態(自然界に見出される)から出發して平面や直線に及ぶ。特に注目すべきは「世界科」"Weltkunde"に對する彼の所見である。世界科とは地質、礦物、動植物、民族、國家、歴史等の實質的教科を一定の中心に統合せるもので、この中心は兒童自身、言ひかへれば兒童の立つ世界、もつと具體的には兒童の直觀の範圍の擴大するにつれ次第に擴がり行く世界である。そしてこ

の直觀の世界の擴まり行く段階に應じ、ハルニツシュは世界科を郷土科、祖國科、地球科に三分した。世界科は、後、多くの教科に分れ行く一切の實質的教材を、兒童の直觀界の擴がり行く程度に於て包括したものであり、この點で、彼は「郷土科の父」とあがめられてゐる。惜しいかな、當時に於ては其の精神を理解するもの少く、未だ廣く行はるゝに至らなかつた。

しかし、ハルニツシュの國民學校の教育に對する貢獻としては何よりも第一に優良なる教育者の養成を擧げねばならぬ。彼は「堪能で敬虔な國民學校の教師は眞に民族の寶、しかも生きた寶である。」「國民學校の教師は民族の教育者として歴史の發展に與り、國民學校は、家庭と等しく、世界の最も大きな事件の搖籃である。」との信念の下に、三十年間師範學校の教育に心身を砕いた。彼は教師の人格をあらゆる教育の源泉とし、教育及び教授の効果はこまかい形式よりも主として教師の全體的態度——家庭、國家、教會等に對する正しき態度をも含めて——に依存すると信じ、從つて學校と教會との關係についても、ディースルヴェークの如き極端な見解を有しなかつた。一八六四年世を去つたときには殆んど教育界から忘れられてゐたが、しかも彼がドイツの實際教育家中最前線に立てることは無條件に認められねばならぬ。のみならず其の教育思想もディースルヴェークよりは一步進んでゐる。

三 ディーステルヴェーク Friedrich Adolf Diesterweg (1790—1866) は勇敢な闘士としてドイツの

新國民學校の爲に、國民學校の教師の權利の爲に戦ひ抜き、彼によつてドイツの國民學校に生命が吹き込まれたとまで稱せられてゐる。一八〇八年以後ヘルボルン（一個年）及びチュービンゲン（二個年）大學で數學、哲學、歴史等を學び、卒業後、マンハイムで家庭教師、ヴォルムスのギムナジウムの教師を経て、フランクフルト・アム・マインの模範學校の教師となつた。こゝで彼はペスタロツチ派の教育家、特に近傍ヴァイスバーデンのド・ラスペー De Laspee と交り、之から大なる影響を受けた。彼はド・ラスペーを「最も深い、最も純粹なペスタロツチ學徒」と稱へてゐる。一八一八年エルベルフェルトのラテン學校の教頭となり、同地でロヒョウの弟子で問答法の達人であるヴイルベルク Wilberg と相識り、始めて初等教育に一生を捧げようと決心した。夫れでハンムのギムナジウムの數學の教師に薦められたのを辭し、自ら求めて當時新設のメーリスの師範學校長となつた（一八二〇年）。在職十二年、同師範學校は日ならずしてプロシヤの模範師範學校を以て目せらるるに至つた。一八三二年ベルリンの新設師範學校校長に轉じ、始めて師範學校に附屬練習學校を設け、教育法の研究を開始した。其の間にも各地を旅行して講演をなし、或は教育會を組織するなど席の暖まる暇がなかつた。一八四六年には盛大なペスタロツチ生誕百年祭を擧げ、記念としてペスタロツチ孤兒院を創立した。けれどもあまりに直情徑行、所信を貫徹するに急であつたから反感を抱くものも少なく、中にも宗教家の強硬な反對を受け、加ふるに爲政者と衝突するなどあり、一

八四七年休職を命ぜられた。しかし彼は一步も譲らず、一八五四年の新法令で、師範學校及び國民學校の程度が引き下げられ、其の教科、教材が著しく制限せらるゝや、斷乎として之に反對した。一八五八年にはベルリンの市會議員に選ばれ、議員として、及び教育的著述家として、いやす鋭さで當時の制度を攻撃し、自己の理想の爲に、特に無宗派の學校の爲に、及び宗教家の監督から學校の解放の爲に奮闘した。

デイーステルゲエークはプロシヤのペスタロッチと稱せられてゐる。しかし彼のペスタロッチに對する態度には前後に於て著しい相違がある。メールス時代では彼の思想はペスタロッチよりも、啓蒙教育家に近く、バゼドウ、ロヒョウ、特にディンテルなどの問答法から大なる影響を受けた。だから當時にありて、彼が「余はペスタロッチ的に活動しよう」と欲する。」と言つたのは國民學校の教師によつて下層の民衆を人間にまで教育しようとの意味を有するに止まり、夫れ以上には出でなかつた。フランクフルトで已にペスタロッチ的な空氣に浸つたとは言へ、尙長い間、未來の人間の教養を自己の教育理想の實現にのみ期待するペスタロッチの考へを「著しい妄想」と貶し、其の派の人々の改革にも反感を抱いてゐた。ベルリン時代では大學でシュライエルマッヘルの講義を聞き、又ベネケの經驗的心理學に興味を有し、外にヘルバルトの著述をも研究し、一時之に心酔してゐたがやがて又離れ、同時にペスタロッチに對する態度も變化した。即ち前にはペスタロッチの著

述中、唯、「リーンハルトとゲルトルート」を推奨してゐたに止まつたが、今や其の全思想を理解し、其の教育的意義を正しく評價し、以前とは全く反對の態度を持するに至り、かくてあの一八四六年の盛大なペスタロッチ記念祭の舉行となつたのである。何れにもせよ、彼がペスタロッチの思想をドイツの國民學校に實現した功績は十分に承認せられねばならぬ。

次に宗教に對する態度に就て一言すると、彼は啓蒙時代の合理主義を承け、超自然的な啓示に對する信仰は精神の發展を阻害するものであるとの信念の下に、宗教及び道德を合理的に解釋する。そしてこの合理的傾向は年と共に加はつた。彼が宗派的な教育を排除し、宗教と教育との分離と宗教家の監督から學校の解放を要求せるは以上の立場から當然のことであり、教會の教へをば教育學とは到底和解の出来ない敵である、とすら宣告する。そして在來の宗派的の學校から共同學校（新教徒と舊教徒を共に教育する）を経て、無宗派の學校へと進み、凡ての兒童に共通な宗教教授（合理的な）を施すに至るのが、十六世紀から二十世紀に至る宗教教育の歴史的發展である、と彼は説くのである。

デイーステルゲエークは一八二〇年處女作「教育一般、特に學校教育に就て」以後、教科書を始め、多くの著作を公にしたが、就中最も重要なものは、一八二七年メールスの師範學校時代創刊し、死に至るまでつづいた「ライン教育、教授新聞」"Rheinische Blätter für Erziehung und Unterricht

mit besonderer Berücksichtigung des Volksschulwesens" に彼及び協力者の寄稿せるものを體系的に纏めた「ドイツの教師に對する教育指針」" Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer" (1834) である。この書に於ては教育の原則及び各科の教授法が取扱はれ、其の一般論に關する部分では宗教と教育に關する彼の見解が特に浮き立つてゐる。其の他の小著では社會改革及び教育改革について論じた「文明の生活諸問題」" Die Lebensfragen der Zivilisation (1836—38) が注目せらるべく、この書で彼は「ドイツの大學の墮落」に反對し、又教育問題としての社會問題が取扱はれてゐる。

教育の目的は人に具はる素質を合自然的に發展せしめ、「人を、眞と善と美に奉仕する自己活動に」導くにある。従つて教育の方法の良否を決定する尺度は自己活動であり、夫れが生徒を單なる受容で堰き止める度に應じて悪しき方法、反對に自己活動を喚び起す度に應じて良き方法である。教授の効果は知識の分量ではなくて一に生徒の自己活動によつて計られる。

しかし自己活動は「眞、善、美に奉仕する」、即ち人間性の發展に奉仕する自己活動であるから、教授は同時に教育しなければならぬ。何によつてか。夫れは一に教師の人格による。ディーステルヴェークは教材や方法よりも教師に重きを置く。曰く「教師は學校に對し、太陽が宇宙に對すると同じ地位にある。機械全體の動力は教師に依存し、彼によつて生命と運動が吹き込まれなかつたら機械は錆びて動かなくなる。教師に精神がなかつたら學校にも精神はなく、少くも良き精神はない。」

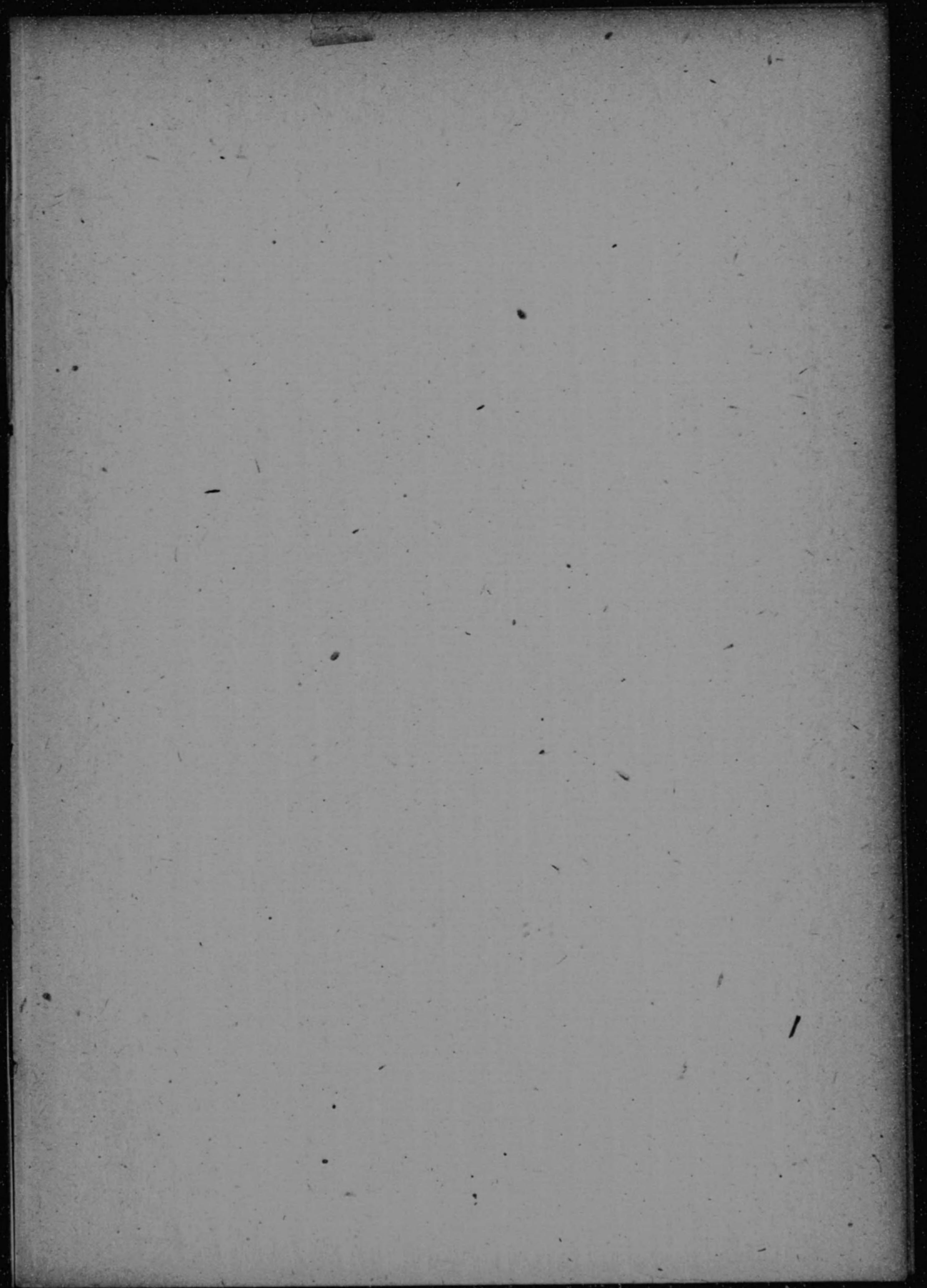
と。又曰く教授が教育的であるか否かは「教師が眞及び善について眞面目に考へ、心から動かされ、善と認められた目的の達成に全力を集中する人であるか否かによつて定まる。」と。然らば教授によつて教育する、かやうな力、即ち彼の言ふ「教授力」" didaktische Kraft" は本來何に由來するか。夫れには固より形式及び内容の兩方面に互り、教材に精通することが要求せられる。しかし夫れ丈ではまだ教授力とはならぬ。教授力は「寧ろ教師の意志の強さに依存する」。「確固たる、エネルギッシーな意志が兵士を英雄たらしめ、學者を研究家、旅行家を發見家たらしむる如く、同じく意志の力は教師を……人間精神の教育者たらしめる」。斷乎たる意志のみ生徒の精神生活を捉へ動かすので、教師の「教授力は鞏固なる性格の力である」。そしてこの故に、彼は教師の權利と物質的待遇の改善の爲に一意努力し、述べ來つた意味での「教授力」を有する教師の養成に全力を注いだ。

「凡ての教授は教育的に作用すべきであり、學校は、本質的に、教授を通してのみ教育する。そして教育する教授のみが眞の教授である」。即ち學校の中心作業は「教育する教授」に存する。大凡教授が生徒の素質の自然の發展に應ずべき（「合自然」）は言ふまでもないが、他方、又夫れは生徒を其の時代の文化に導き入れる爲に、内容上、時代の文化を顧慮しなければならぬ（「合文化」）。「文化及び時代の要求を顧慮しての合自然への努力」——これが教育學の根本原則であり、教授は合

自然的で且合文化的であらねばならぬ。教授の方法に關し彼は問答法による發展の取扱を強度に奨勵し、且直觀から出發すべきことを唱へ、教科では國語、理科、算術、幾何等の諸教科、即ち自己活動に最も適した諸教科に特に注意を拂つた。中にも算術の教授についてはベスタロッチ及び其の徒が心算による抽象數の形式的練習に偏せるに反對して、心算と筆算とを併せ課し、實用的計算を重んじた。この點ハルニツシユも同じであるが、しかし夫れはディーステルヴェークによつて一層徹底的に主張せられ、算術の教授はこゝに全然面目を改むるに至つた。宗教教授では聖教問答による宗派的な教授を排し、新舊兩聖書の物語を基礎とし、これから宗教的、道德的な教へを導くといふ、超宗派的な教授を奨めた。

ディーステルヴェークは其の態度があまりに攻撃的であつた爲に、或は煽動者と誤解せられ、或は國民學校のキリスト教的な本質を破壊せるものと非難せられたが、他方ではドイツ國民學校に新しい生命を與へたものとして賞揚せられるなど、當時に於て批評がまぢまぢであつた。其の教育思想につきても、内容を全く無視しはしなかつたが、しかし形式的なるに偏してゐる、あまりにも合理的で、生活、特に宗教的、道德的生活の非合理性に對する理解が缺けてゐる、要するに、啓蒙精神を超出しないのみか、全く其の中に生きてゐるとの批評が下されてゐる。彼は體系的な教育學者と稱するよりも寧ろ實地の教授に秀でた實際教育家であつた。自ら「其の師の言葉に盟約する」

學派を作らうと欲しないと云つた如く、彼自身亦常師なく、本來、啓蒙的、合理的であつたが、又ベネケ、シュライエルマツヘル等の思想をも採り入れ、之を貫くに下層の民衆をまことの人間たらしめようとのベスタロッチの精神を以てし、筆に口に、恐れず撓まず、自己の主張を貫きとほした。彼が反對しつづけた一八五四年の法令に代つた一八七二年の「國民學校一般規定」は明かに彼の事業がモデルとなつてゐるといはれてゐる。彼は決して無益には戦はなかつたのである。彼の逝くや、門人相集つて盛んな追悼會を催し、一八六七年には「ディーステルヴェークの、精神を刺戟し覺醒する教授法を教師の間に擴め、國民學校の向上と及び國民教育を進める一切の施設に寄與し、かくて教職の、貴い社會的地位の爲に活動しよう」との目的の下に「ディーステルヴェーク院」が設立せられた。如何に教育者の尊崇の的となつてゐたかが知られる。



索引

ローマ数字 I は上巻を、同じく II は下巻を、アラビア数字は頁数を示す。
内容項目は主として、時代と人物に關し及び教育思想の發展に對して注意すべき事項を掲げ、尙頁數以外なるべく學者、教育家の名を擧げ、同項目に關する諸家の見解を検索するに便ならしめた。

ア

- 愛 I ゲーテ 284, ベスタロッタ 315-7, フィヒテ 454-6; II シュブランゲル 171, ケルシェンシユタイネル 347, シュナイデル 355-7.
- 教育愛と社會的型式 I 345-6, 352-3.
- 愛國心 I フィヒテ 468-9.
- アイスレル I 442.
- アイデティク I 281.
- アヴェナリウス I 381.
- アヴェロイーズ I 13.
- アウグスティヌス(聖) I 15 47 51 65.
- 赤い危險 I グルリット 21.
- アカデミー I 16 149 164 552.
- アガベ I 356.
- アクアヴィヴァ I 91.
- アッハ I 265.
- アドラー I 92 427.
- アドレル I 446-50.
- アリストテレス I 13-4 28 30 37 38 47 66 75 93

107 115-6 129 570; II 452.

- アルクイン I 8.
- アルベルツス・マグヌス I 14 16.
- アルステット I 140 150.
- アンセルムス(聖) I 13.
- アンドレエー I 138.

イ

- イエーナプラン I ベテルゼン 146.
- イエーンシュ I 230-1.
- 畏敬 I ゲーテ 283-4.
- 意識一般 I カント 115.
- 意志教育學 シュライエルマッヘル I 538.
- 意志有機體 I ベルト 53.
- 一般意志と總意 I ルソー 183-4.
- 一般教育科學 教育科學を見よ.
- 一般妥當性(教育學及び陶冶理想の) I シュライエルマッヘル 525-8; II グルリット 23, ベルゲマン 49, ベルト 52, ディルタ * I 166-7, リット 192 197.
- 一般的形式的陶冶 I ベネケ 530.

一般的陶冶 I 276; I 7 8 10
20 88 106 209.
と職業的陶冶 I ゲーテ 278—
81, ベスタロッテ 320; I ケ
ルシェンシュタイネル 87—8
209—10, シュブランゲル 173.
意味聯關 I シュブランゲル 175.
印象主義 I 2 341.

ウ

ヴァイゲル I 408.
ヴァイゲル I 174.
ヴァイス I 354.
ヴァイズマン I 246.
ヴァイツ I 406 562 568—72;
I 367.
ヴァイメル I 337—8.
ヴァグネル I 184 305—7.
ヴァルテル I 382 426.
ヴァルテル・フォン・デル・フォーゲル
ヴァイデ I 24.
ヴァーヴェス I 37 39 104—13
121 138 150.
ヴァグット I 320 329; I 35.
ヴァックリッフ I 65 66.
ヴァッケルト I 553.
ヴァットリーノ・ダ・フェルトレ I
50 51—2.
ヴァネケン I 418—23.
ヴァルベルク I 591.
ヴァルマン I 182 231 413 426
553 562 569 570; I 33 72
57—7 130 139 144 148
289 309—17 451.

ヴァンケンティウス I 32.
ヴァンデルベント I 25 26 39
65 238 239 285 524; I 86
219 252—3 313.
ヴァンフェリング I 47 53
58—9.
ヴェシウス I 50 51.
ヴェツセル I 53—4.
ヴェーベル・エルンスト I 333
335—40.
ヴェーベル・マックス I 67.
ヴェルジェリウス I 50.
ヴェルジリウス I 44 45.
ヴェンツェル I 538.
ヴォーダン I 3.
ヴォルケ I 211 214 348.
ヴォルテール I 126 179.
ヴォルフ・アウグスト I 232—7
296.
ヴォルフ・ヴィルヘルム I 286.
ヴォルフ・クリスティアン I 126.
165—1.
ヴォルフラム・フォン・エッセンバッハ
I 20 24.
「美しき魂」 I シルレル 253—4
260.
ヴント・ヴィルヘルム I 565;
I 31 155 284 390 451.
ヴント・マックス I 166.

エ

「永存の教育學」 I ヴィルマン—
派 I 315.
エスイタ派 I 83 起原と信條

90—1 教育組織と内容 92—4,
訓練(精神修練) 95—9, 教授
99—100, 其の發展 102—3,
吉利支丹學校 103—4.
エーストライヒ I 403.
エックハルト I 25—6.
エッゲルスドルフェル I 453.
455.
エビクロス I 119.
エビングハウス I 284.
エーベルハルト I 113 461—
2.
エラスムス I 50 53 54 55—
6 59—61 62 77 94 105
106 140.
エリッゲル I 79.
エルネステイ I 230.
エーレル I 214.
エーレルト I 473 482.
エロス I 359.
エンゲル I 287.

オ

オイケン I 207; I 101 224
412.
オーケン I 379.
オッカム I 28.
オットー I 463—8.
オーデンヴァルト學校 I 424.
オリゲネス I 15.
愚物 I 355 359 37—77.

カ

外學 I 9.

改革的教育學 I ケイ 14—20,
グルリット 20—27; I リット
203.
快活な家 I ヴァットリーノ・ダ・フ
ェルトレ 51.
カイゼルリッパ I 195.
概念實在論 I 28.
解放(と拘束) I コーン 233.
カヴェラウ I 404.
カウディーク I 100 108—13
360 392 397—8 401—2
453—4 460 470.
科學院 I 149.
學習學校 I 390.
獲得聯關 I デイルタイ 159—
60.
隠れた(共)教育者 I ヴァイツ
367.
としての環境 I 378—9.
カシオドールス I 10.
過失學 I ヴァイメル 368.
カスパール I 19.
價値の區分 I 哲學的 294—6,
ケルシェンシュタイネル 205;
教育的 教育的價値論を見よ.
學科制 I フランケ 172.
客觀的自然主義 I コメニウス
151.
客觀的精神 I ヘーゲル 475.
學校劇 I 84 98.
學校市制度 I 98.
學校自治制 I トロツツェンドルフ
85.
自治組織を見よ.

学校自治體 I デルベルト 579—80; I ライン 71.
 カッテル I 278.
 活動學校 I リンデ 390.
 活動説 I ミュンステルベルヒ 250.
 カニシウス I 94 102.
 神の國(と教會) I 30 36.
 ガリレイ I 129.
 カルヴィン I 65.
 カールシュテート I 180 204.
 カールゼン I 460.
 カール大帝 I 7—9 69.
 カレジ I エスイタ派 92—4.
 カロリナ文藝復興 I 9.
 環境教育學 I 376—8.
 關係説 I 社會學説として 78; ヘーニヒスヴァルト 120.
 感情のイロハ I フィヒテ 455.
 芳ンスベルク I 343—4 402.
 カント I 143 176 182 212 223 237 256 273 389 428—39 442 510; I 428.
 カンパネラ I 138.
 カンベ I 215 287 348.
 管理 I ヘルベルト 405—7.

キ

機會教授 I オットー 466.
 キケロ I 37 43 44 45 47 60 83 93 107.
 キケロ主義 I 45 46.
 騎士(の教育) I 20—21.
 記述的教育學 I フィッシエル等

132—5.
 記述的分析的心理學 I デイルダイ 155—6.
 基礎學校 I ナトルブ 42, ライン 72.
 ギツィッキ I 428.
 キオスト I 5 329.
 技能 I シュライエルマッヘル 538.
 技能のイロハ I ベスタロッテ 331.
 歸納法 I ベーコン 116.
 規範民族 I フィヒテ 465.
 基本點 I ベスタロッテ 326.
 基本陶冶 I ベスタロッテ 340—41 346 382.
 宮廷學校 I 8.
 キューネル I 407.
 「球の法則」 I フレーベル 353 354 362 374.
 休養練習 I フランケ 171.
 教育愛 愛を見よ.
 教育科學 I クリーク純粹
 教育科學 136—145, ベテルゼン
 一般教育科學 146—152.
 教育學と哲學 哲學と教育學を見よ.
 教育學の科學的位置 I ベウフ 129.
 教育技術學 I 238.
 教育郷 I ゲーテ 281—5.
 教育事實學 I 238.
 教育者(隠れた) 隠れた教育者を見よ.

教育者の心理學 I 345—66.
 教育的印象主義 I 341.
 教育的價值(論) I 290; デュール 290—3, シュブランゲル 297—302, ヘンリー 302—5, ヴァグネル 305—7.
 教育的環境學 I ヴァイメル 367—8, ヘルパッハ 368, プーゼマン 371—6.
 教育的教授 I ヘルベルト 408—9; I ナトルブ 45, リンデ 333.
 教育的興味 興味を見よ.
 教育的財論 I 289.
 教育的心理學 I 564; I 261—2 373.
 教育的罰(賞) I 198 417—8 494.
 教育の限界 I グリゼハッハ 231—4, リット 235, コーン 236—7.
 教育病理學 I 565.
 教育樂觀説 I ロック 156.
 ライブニッツ 163.
 教科の區分(と聯關) I ヘルベルト 307, デルベルト 307—8, ライン 308, ベルト 308—9, ヴイルマン 309—11.
 教材 陶冶財を見よ.
 の統合 統合を見よ.
 の聯關 陶冶財を見よ.
 教授の段階 I ヘルベルト 409—10, ツィルレルとライン 414; I 諸家の 450—3.
 教授力 I ディーステルヴェーク

595.
 教導 I ヘルベルト派 407 567.
 共同生活の同胞 I 52—3 65.
 共同社會學校 I ガウディーク 112, シャーレルマン 342—3.
 規範的精神 I シュブランゲル 175 178.
 教父哲學 I 65.
 興味 I ヘルベルト 399—403 409, ケルシェンシュタイネル 217—8.
 吉利支丹學校 エスイタ派を見よ.
 キールケゴール I 228.
 筋肉運動主義 I ライ 249.
 吟遊詩人 I 25.
 勤勞學校 作業學校を見よ.

ク

クインテリアマス I 37 43 45 49—50 51 59.
 グーツムーツ I 213 220.
 組合(同業者の)と教育 I 22.
 「暗い所得」 I ビルデブランド 333.
 グラウ I 112.
 クラウゼ I 378.
 グラーセル I 513.
 クリーク I 135—40 378.
 グリゼハッハ I 228—34.
 クリュエゲル I 267 269.
 クリュージ I 582.
 クリュージ(小) I 583.
 グルーネル I 352.
 グルリット I 20—7.

グレンヴァルト I 272 279 345
386.

クロー I 261 273.

グロース I 272.

クロデガング I 9.

クローマイエル I 137.

訓練の段階 I ヘルベルト 417—
20.

ケ

ケイ・エレン I 14—20 423.

敬虔主義 I 起原 166, 根本特
質 166—7, フランケ 166—
75.

と實科学校 174—5.

敬虔・知・能辨(教育目的として)
I 83.

経験的教育學 I 186.

経験的心理學 I ヴィーヴェス
106, ベネケ 557—8.

形式社會學 I 78.

形式的段階(教授の) I 414 576.

形式的陶冶 I ヴォルフ 235.
フンボルト 295, ベスタロッチ
314; I シュブランゲル 172,
ケルシェンシュタイネル 208.

と實質的陶冶 I ベネケ 560.

藝術教育 I ラングベーン 9.

藝術教育運動 I 264 379—87.

藝術教育會議 I 383—6.

藝術部(大學の) I 16 17 18
80.

形態心理學 I 267—8.

啓蒙時代 I 意義と代表的指導者

126, 根本傾向 127—8, 二大
方向 128—30, 特色 131—2.

契約説 社會契約説を見よ.

ケースゲン I 209.

ケスネル I 227—9.

ケッスレル I 78.

ケッセル I 204 227 235.

決定論 I ヘルベルト 390.

グットレル I 105; I 73.

ケッペル I 58

ゲーテ I 142 217 241 250

251 265—86; I 189 219

281 284 361.

ゲディケ I 508.

ケトレー I 284.

ケブレル 129.

ゲヘーブ I 423—6.

ケルシェンシュタイネル I 282;

I 84—92 173 187 204—20

327—3 346—51 352 384

391—7 402 437—9 470.

ケルネル I 288.

ゲールラント I 182.

權威(教育的) I ケルシェンシュタ
イネル 349, シュナイデル 359.

權威的教育 I ブッデ 105.

限界 教育の限界を見よ.

言語學的循環 I ヴイルマン 312.

言語主義 I 88.

言語的實學主義 I 152 228
232.

言語的新人文主義 I 232.

現在と未來(教育上) I ルソー

191, シュライエルマッヘル 533

—5; I ケルシェンシュタイネル
215.

現象學的(方法) I 133 137 197
373.

權力意志 I ニーチェ 3, アド
レル 447.

コ

個愛(利己) I ルソー 192.

合一の公理 I ケルシェンシュタ
イネル 213.

工作教授 I 406.

合自然 I 134 139 145 166
188 313—4 388 429 477
482 595.

工場教授 I 406.

構造 I リット 78, デルタイ
157—9, シュブランゲル 177.

構造心理學 I デルタイ 156,
シュブランゲル 175.

構造聯繫 I デルタイ 157—9.

拘束(と解放) I コーン 235.

行動學校 I ライ 251 390.

合文化 I ディーステルヴェーク
595.

公民科 I 226.

公民教育 I ケルシェンシュタイネ
ル 84—92, フェールステル
92—8, レーマン 226.

と社會教育 I 89 94 95.

ドイツ民族公民教育會議 I 83.

公民教授 I 89 94 96.

ゴガルテン I 228.

國語學校 I コメニウス 149.

小姓 I 20.

個人主義(教育上) I ルソー
182; I ニーチェ 3—7, ラン
グベーン 7—9, ラガルデ 10
—11, ケイ 14—20, グルリッ
ト 20—27, ツィルレル 30.

個人的教育學 個人主義を見よ.

個人的心理學(と性格陶冶) I ア
ドレル 446—50.

個人と社會(教育目的として) I ナ
トルブ 55—7, ヴィルマン 59
—63, ライン 69—72, コーン
73—6, リット 77—82, ブッデ
103—4, ガウディーク 109—110.

個性的地位 I ベスタロッチ 318
—21.

個性と教育 I ヘーゲル 483.

古代學 I ヴォルフ 231 233.

古代の教育 I 1—6.

國家 I. ベスタロッチ 309—11.
シルレル 260—61, ヘーゲル
480—82, フィヒテ 469, シュテ
イエルマッヘル 524; I ヴィル
マン 61 66, フェールステル
94—5, ケルシェンシュタイネル
87 90, レーマン 266.

國家的教育 I ヘーゲル 472;
I ヴィルマン 66, ヘルバッハ
369.

國家と國民 I. 62 297.

コフカ I 268.

コベルニクス I 37 38 129.

コメニウス I 86 107 113 130
136 137—53 154 162 203

- 323 347; I 312 313 456.
 コメニウス會 I 153.
 ゴールトン I 278 284.
 コルネリア I 108.
 コロンブス I 37 38.
 コーン I 72-7, 130 214.
 コント I 103.
 コンペレー I 177, 182.
 根本現象 I ゲーテ 269-70.
 根本公理(陶冶の) ケルシェンシュタ
 イネル 187 212-4.
 根本能力 I ベネケ 556.
- サ
- 再構成心理學 I ナトルブ 118
 -9.
 差異心理學 I シュテルン 278-9.
 ザイデル I 407.
 ザイニーク I 406.
 財の運動 I ヴィルマン 59 67
 289.
 ザイフェルト I 323 451.
 作業科 I ケルシェンシュタイン
 90-91, ザイフェルト 323.
 作業學校 I フィヒテ 460; I
 ナトルブ 46, リット 195; 起原
 388-90, 名稱 390-91, ケル
 シェンシュタイン 391-7, ガ
 ウディーク 111 397-8, リス
 マン 399-401, レーマン 402,
 シャーレルマン 342, ガンスベ
 ルク 343.
 作業教授(原理として及び教科として)
 I 396 405-8

- 作業團體 I 91-2 94 376.
 作業と體驗 體驗教授を見よ.
 作業の過程と技術(教授上) I ガ
 ウディーク派 453-5.
 作用心理學 I 125.
 ザルヴェルク I 100 153 397
 420 584; I 450-51.
 ザルツマン I 215-7 348; I
 410 428 440.
 三學 I 10.

シ

- 自愛 I ルソー 192-3.
 シェプレル I 349.
 シェリング I 289 352 473
 511.
 シェーレル・マックス I 317-21.
 シェレル・ハインリッヒ I 406.
 四科 I 10.
 市會學校 I 23.
 「視界の相互性」 I リット 79.
 時期的教授 I 323.
 ジクヴァルト I 253-4.
 思考心理學 I ヘーニヒスヴァル
 ト 125, ヴェルツブルヒ派 265
 -7.
 事實的教育學 I リンデ 335.
 事實の眞と理性の眞 I ヴォルフ
 165.
 自助への補助 I ベスタロツナ
 314.
 自然 I ルソー 180-82.
 自然科学的心理學と記述的分析的心理
 學 I デルタイ 155-6.

- 自然科学と精神科學 I デルタイ
 154.
 自然形式(教育の) I 1.
 自然人 I ルソー 185-7.
 自然的教育 I カント 434; I
 グルリット 23-4.
 「自然の體系」 I 41; I 154.
 自然の罰(賞) I ルソー 198.
 「自然の光」 I 127.
 ヘルベルト 417.
 「自然の理性」 I 41.
 自然の理性化 I シュライエルマッヘ
 ル 519.
 七自由科 I 10.
 自治組織(生徒の) I 91 97 98
 -100 39.
 學校自治制を見よ.
 實科學校(起原) 敬虔主義を見よ.
 實驗教育學 I モイマン 239-
 46, ライ 246-52, 其の限界
 252-61.
 實驗心理學 I 239.
 實在論(教育上) I ベテルゼン 152.
 實質言語學 I ハイネ 231.
 實質辯證法 I グリゼバツハ 230
 235.
 實證主義 I 179 193.
 實證的社會的教育學 I 103.
 實踐的理念 I ヘルベルト 392-4.
 實用主義 I 319.
 指導(と放任) I リット 198-
 201.
 指導學 I ベテルゼン 149.
 「兒童から」 I 19 242.
- 「兒童の里」 I 5 15 312 463.
 兒童の世紀 I 5 14 16.
 兒童本位 I 207; I 16 19.
 思辨的教育學 I 552; I 189.
 シャイブネル I 402 454-5.
 シャヴィエル(聖) I 103.
 社會(の區分) I ヘルベルト
 420-21, シュライエルマッヘル
 524; I ヴィルマン 65.
 社會科 I デルベルト 579.
 社會學と教育學 I 31; ヘルベルト 53.
 社會教育と公民教育 公民教育を見
 よ.
 社會契約說 I ルソー 184; 307.
 社會體 I ヴィルマン 61-5.
 社會的教育學 I ルソー 182-3;
 I ナトルブ 38-46, ベルグマ
 ン 47-9, ヘルベルト 50-52.
 社會的交叉 I リット 82 234.
 社會と個人 個人と社會を見よ.
 社會有機體說 I 51; 社會體を見
 よ.
 シャフツベリ I 175 225 253;
 I 189.
 シャルコー I 278 280.
 シャーレルマン I 340-43 402.
 シャロテー I 209 214.
 ジャン・パウル I 513.
 自由(教育の方法として) I プッデ
 105-6.
 シュヴァルツ I 513.
 習慣 I レーマン 224.
 自由教育 I 19 105.
 宗教改革 I 端緒 65, 其の精神

- 65—7.
 とルネサンス運動 I 47.
 と教育(ルテル) I 68—73.
 と人文主義 I 47—8 53—6
 62—4 74—81.
 宗教教授と道德教授 I 428—30
 435—6.
 従士 I 20
 習字學校 I 23.
 自由自治體 I ヴィネケン 420
 422—3.
 自由に作用する因果 I シュトリ
 ユンベル 564.
 就學の義務 I 8 69.
 シュタイン I 60 61.
 シュタインベルヒ I 194 420.
 シュツルム I 37 53 82—4 94
 114.
 シュテフェンス I 509 551.
 シュテルン・ウィリアム I 205 212
 263—5 278—9 284 286 287
 367 445.
 シュテルン・エーリッヒ I 184.
 シュトイ I 407 562 566—8
 573; I 450.
 修道院學校 I 9.
 シュトラウス I 4.
 シュトリュンベル I 399 562
 563—6; I 262.
 シュトロベール I 535.
 シュナイデル I 351—62.
 シュパン I 81.
 ジューフェルン I 299.
 シュブランゲル I 269 284 287
 289 291 297 376 420; I
 34 85 168—84 204 211 213
 214 280 288 297—302 304
 322—3 345 357.
 シュブレンゲル I 324 327
 シュペーネル I 164 166 168.
 シュベングレル I 195.
 シュミット I 304 353.
 シュミットクンツ I 305.
 シュライエルマツヘル I 97 507
 —54 592; I 60 61 66 144
 168 178 189 204 215.
 シュルツェ・オットー I 134.
 シュルツェ・ヨハネス I 501 I 7
 10.
 シュレーゲル I 510.
 順應 I 157 159.
 純潔(教授の) I 410.
 純粹教育科學 教育科學を見よ。
 小宇宙 I 40 143 294; I
 173 318.
 消極教育 I 145 188—90;
 I 16.
 情操 I シュライエルマツヘル
 538.
 情操教授 I ヘルバルト派 45.
 助教法 I 85.
 職業(内的と外的) I 214
 職業的陶冶 I 90 210.
 と一般的陶冶 一般的陶冶と職業的
 陶冶を見よ。
 植物類推 I 145 151 188 372
 388.
 助成 I シュライエルマツヘル

- 544—5.
 ショーベンハウエル I 6.
 自立的科學(としての教育學) I ク
 リーク 137, レーマン 222,
 モイマン 240—41. ライ 248.
 シルレル I 250—64 266 287
 288.
 素人藝術主義 I 383.
 人格價值 I ケルシェンシュタイネ
 ル 203.
 人格主義 I シュテルン 263—4.
 人格的教育學 I プッデ 102—8,
 ガウディーク 108—13, リンデ
 328—35, ヴェーベル 335—40,
 シャーレルマン 340—43, ガン
 スベルク 340 343—4.
 新カント主義 I 2.
 新カント派 I 127.
 新教宗典全集 I 113.
 新人文主義 I 154 175; 起原と
 特質 222—7, と實科 229—30,
 實質言語學と古代學 231—3,
 代表的教育學者 244—300.
 新スコラ學派 I 113—4 118.
 人道民族 I フィヒラ 451.
 神祕主義 I 25—6.
 「人文」(人道) I ヘルデル 241—
 3, フンボルト 291—3.
 人文主義 I 教育理想 36, イタ
 リヤの 43—6, ドイツの 46—
 8; 代表的教育學者 イタリアの
 50—52, ドイツの 52—61; I
 179.
 と宗教改革 宗教改革を見よ。
 ジンメル I 78 195 214.
 信用の教育 I プラデ 106.
 心理的教育學 I ベネケ 559—
 60, シュトリュンベル 564;
 I 186.
 人倫 I ヘーゲル 477—80.
 新ルソー主義 I 15.
 ス
 スアルス I 118.
 スコラ哲學 I 13—5 29 65.
 スコラレ I 17.
 ストア I 14 120 133.
 スピノザ I 129 268.
 セ
 性格 I ケルシェンシュタイネル
 437—9.
 生活科 I フェールステル 433.
 生活學校 I 徹底的學校改革者
 404.
 生活共存體 I ユング 42.
 性(慾)教育 I 440—42.
 生産學校 I 徹底的學校改革者
 404.
 政治的教育學 I 507; I 143.
 青少年學 I 261.
 精神科學 自然科學と精神科學を見
 よ。
 精神科學的心理學 I シュブラン
 ゲル 174—8.
 精神修練 I エスイタ派 95—7.
 精神生活 I オイケン 102, レ
 ーマン 224

精神的教育學 I ブッデ 102-8.
 精神分析(と性格陶冶) I フロイド 443-6.
 精神有機體 I ベルト 51, クリーク 139.
 性的啓蒙 I 441-2.
 精讀と相讀 I 228 230.
 青年運動 I 195 196.
 青年文化 I ヴィネケン 419-20.
 生の形式 I シュブランゲル 174 177, ケルシェンシュタイン 213.
 生の合一 I フレーベル 354 355-8.
 生の哲學 I デルタイ 153; と教育 リット 195-7.
 世界科 I ハルニッシュ 589.
 世界の美的表現 美的表現を見よ. 説得(理非の) I 159 190 199 493 496.
 セネカ I 162.
 ゼーベルク I 14.
 ゼムレル I 174.
 ゼルツ I 265 268.
 先驗綜合 I ヘルベルト 383-4.
 全國教育會議 I 407-8. 460.
 潜在的良心 I リップス 219.
 専心 I ヘルベルト 409.
 全體性心理學 I 268-9.
 全體性の公理 I ケルシェンシュタイン 213.
 全知識 I コメニウス 140.

ソ

綜合教授 I ヘルベルト 411.
 綜合教授(初學年の) I 323-4 462; オットー 466-8; 心理的基礎 463-9, 教科案の位置 469. 其の諸相 470-1.
 綜合法 I コメニウス 146.
 創造的綜合 I 565; I 155.
 ソクラテス I 147 338 440.
 ソクラテス(問答)法 I 316 346 584.
 ソラ I 9.
 存在と當爲(教育上) I 126-31.

タ

大宇宙と小宇宙 I フンボルト 293-4.
 大學(中世の) I 16-20.
 體驗 I ガウディータ 111, デルタイ 156-7.
 體驗學校 I ガウディーク 111, 徹底的學校改革者 404.
 體驗教授 I 意義と特質 455-8; ノイベルト 458-9 460, エンゲルト 459-60.
 體驗と作業 460-2.
 體驗と了解 了解を見よ.
 對象的思考 I リンデ 333.
 ターウィン I 15.
 タウロウ I 473 553.
 高嶺秀夫 I 583.
 タキツス I 1.
 タクト(教育的) 敏感を見よ.
 托鉢僧團 I 72.
 ダンテ I 43 44.

チ

地位(個性的) I ベスタロッテ 218-20.
 致思 I ヘルベルト 409.
 知能検査 I 發達 284, ビネー・シモン検査法 285, 優良兒選抜 286; 限界 287-9.
 中心教科 I 325.
 中心統合 I 567; ツィルレル 574-5, I 314.
 チュルク I 582.
 超人 I ニーチェ 4; の教育 5-6.
 調節(教授の) I 410.
 調和的發展 I 人文主義 36, アグリコラ 56, ベスタロッテ 313; I ニーチェ 6, ナトルプ 116-7.
 直觀 I コメニウス 146-8, ベスタロッテ 322-3.
 直觀型 I ライ 251.
 直觀像(主觀的) I 280-83.
 直觀的實學主義 I フランケ 171.
 直觀のイロハ I ベスタロッテ 330 455.

ツ

ツァーン I 577.
 ツーエン I 285.
 ツーグレル I 43 44 48 62 77 95 147 171 207 289 553 562 567.
 ツィルレル I 408 414 424 562

572-7; I 30 314 334 450.
 ツェルレル I 298 582.

テ

ティースタルヴェーク I 191 580 583-5 590-97; I 428.
 ティッテス I 560-61; I 58 428.
 ティドロ I 178.
 ティルタイ I 237 507 511; I 77 152-68 169 174 175 185 195 253 313 457.
 ティンテル I 584 592.
 テューイ I 86.
 テュール I 290-93.
 テオドゥルフ I 8.
 デカルト I 39 117 129 155; I 205.
 哲學と教育學 I コーン 73-6, リット 77-82 193-7, ブッデ 102-3, ナトルプ 114-6, ヘーニヒスヴァルト 120-24, マウフ 129, ヨハンゼン 130, シュブランゲル 179.
 哲學の自立(中世後期の) I 27-8.
 徹底的學校改革者 I 379 403-5.
 テトメル I 8.
 デモクリトス I 14 38.
 テーリング I 345 353-5 363.
 デルベルト I 562 577-81; I 71 307 422 450.
 デレカート I 322 329 345.
 テレンティウス I 135.
 田園教育舎 I 217 281 458;

- 起原と特質 409—10, 教育目的
と方法 411—5, 舎の生活 415
—6.
- デンツェル I 405.
テーンニース I 421.
- ト**
- ドイツ科 文化科を見よ.
ドイツ語學校 I 23.
トイッシュェル I 99.
ドイツ民族公民教育會議 I 83.
ドイツ倫理教化會 I 92.
統一學校 I 150 548; I 72
405.
富爲と存在(教育上) I 126—31.
同化(社會的) I クリーク 138,
ヴィルマン 144, ベテルゼン
148.
統合(陶冶財の) I ツィルレル
314, ヴィルマン 315—7,
シェーレル 317—21, エッゲル
スドルフェル 321—2.
郷土生活による統合 322—4.
綜合教授と文化科を見よ.
同情 I ルソー 193.
同情の練習 I フェールステル 96.
道德教授 I カント 435, ヘー
ゲル 49; I ケルシェンシュタ
イネル 91; ヨードル 429,
パウルゼン 435.
と宗教教授 I 428—30 435—6.
道德的教育學 I フェールステル
430—35.
編物的遠近の法則 I ベスタロッツ

338.
同胞の原理 I ベテルゼン 148.
トゥムリルツ I 272 273.
陶冶 I ナトルプ 38, ベテル
ゼン 150, シュブランゲル 170
—73, ケルシェンシュタイネル
状態として 205—11, 理念とし
て 207, 作用として 211—7,
レーマン 224, シェーレル 318.
陶冶價值 教育的價值を見よ.
陶冶財 I の區分 教科の區分を
見よ; の聯關 311—3; の統合
統合を見よ.
「陶冶された俗物」 I ニーチェ 4.
陶冶の根本公理 根本公理を見よ.
フックス・スコトッス I 16.
ドナル I 4.
トブレル I 329.
トマシウス I 164 168.
トマス・アキナス I 14 16 29
65 93; I 314 318.
豊豆秀吉 I 103.
トラップ I 215 218—9.
ドリンゲンベルヒ I 53.
トルストイ I 344.
ドルフ I 442 454.
ドレスドネル I 387.
ドレスム I 29.
トレンデレンブルヒ I 58 153.
トロツヴェンドルフ I 84—5.
フロービッシュ I 566 568 572;
I 67.

ナ

- 内學 I 9.
内(在)的目的 I デイルタイ 157
159 175.
ナトルプ・パウル I 182 224 345
413 426 522 523 526 553;
I 31 32 34 35 37—47 71
86 103 114—20 126 144 188
194 428.
ナトルプ・ルートヴィヒ I 298.
- ニ**
- ニコロヴィウス I 290.
二十世紀教育學(特質) I 28—34.
二重の眞理 I 28.
二重目的(教育の) I レーマン
224—6.
ニーチェ I 46; I 1 3—7 9
15 195 280 294 419 421.
日常生活の心理學 I ヴィンデルバ
ント 252.
ニッセン I 8.
ニーデレル I 304 345.
ニートハンメル I 472.
ニーマイエル I 403 411 513;
I 67.
ニュートン I 129.
- ネ**
- ネアンデル I 85—6.
年齢別話方 I オットー 464—5.
- ノ**
- ノイベルト I 467.
ノヴァリス I 352.

- 能力心理學 I 387 556.
ノール I 327.
- ハ**
- ハイネ I 230—31.
パウフ I 129.
パウルゼン I 15 18; I 87
121 169 221 428.
パウロ(聖) I 55.
バカラリウス I 17.
ハーゼ I 416.
バゼドウ I 142 209—15 431
592; とルソー 209—12.
波多野貞之助 I 68.
罰 I シュライエルマツヘル 542
—3.
教育的罰と自然の罰を見よ.
發達心理學 I 261—2;
と教育 270—71.
發達段階(兒童の) I 273—8.
發展的汎神論 I ゲーテ 268.
ハートリープ I 177.
母の學校 I コメニウス 148.
ハーフェンシュタイン I 327.
バルテルス I 567.
ハルテンシュタイン I 384 566
572.
ベルト I 44; I 50—54 139
171 308—9 435—7.
ハルナック I 80.
ハルニッシュ I 583—90 596.
汎愛論 I 211 215.
汎愛派 I 153 431; と教育 208
—21; とルソー 212.

汎性慾主義 I フロイド 415.
 判然と明瞭(概念の) I 166.
 反復説(約説原理) I 329 576.
 萬有在神論 I 241 360 378.

ヒ

ピアソン I 284.
 美育 I シルレル 252—64.
 ピオルコヴスキ I 286.
 比較法 I コメニウス 146;
 I クリーク 137; プーゼマン
 373.
 ビッチン I 32—3.
 美的國家 I シルレル 260—51.
 美的判断 I ヘルベルト 391.
 美的表現(世界の) I ヘルベルト
 394—7.
 ビネー I 287.
 ビネー・シモン検査法 I 285.
 批判的教育學 I ナトルブ 114—
 20; ヘーニヒスヴァルト 120—
 26; 188; グリゼバツハ 234.
 ビビン I 7.
 ヒブレル I 33.
 百科全書主義 I 139.
 ビュタゴラス I 38 482 500.
 ビュヒネル I 2.
 ヒューム I 129.
 ビューレル・カール I 265 266—7.
 ビューレル・シャルロッテ I 265.
 ビュロン I 119.
 表現主義(教育上) I 196.
 表現(模寫)的教授 I ヘルベルト
 411; I リンデ 334, ノイベ

ルト 458.
 表象機制説 I ヘルベルト 389
 表象型 I 251.
 ヒルデブランド I 329—31.
 ヒルル I 85.
 敏感 I ナトルブ 118, ケル
 シェンシュタイネル 91 348,
 シュナイデル 358—9.
 稟賦 I シュテルン 284.

フ

フアルケンベルヒ I 512.
 フイエー I 282.
 フイツェル I 86 132—4 255
 262 352.
 フイヒテ I 185 298 308 326
 382 426 439—71 473 551;
 I 324 410 418 419.
 フェールステル I 84 92—8
 254 359 403 426 430—35
 439—41 460.
 フェルトレ・ヴィットリーノ・ダ I
 51—2; I 410.
 フェレンベルヒ I 281.
 マーヴィンケル I 345 362.
 フォーグト I 2.
 フォルケルト・ハンス I 29.
 フォルケルト・ヨハネス I 336—7.
 フォルベルク I 441.
 輻合説 I シュテルン 264.
 フーゲンハーゲン I 87—8.
 フス I 65.
 プーゼマン I 371—8.
 フッセル I 78 133 177 190

197 450.
 ブッデ I 101—8 112.
 物的遠近の法則 I ベスタロッテ
 327—8.
 ブッテン I 54—5 62
 ブデー I 106.
 ブーフェンドルフ I 164.
 普遍妥當性 一般妥當性を見よ.
 普遍論争 I 28.
 ブライエル I 265.
 ブラウン I 556.
 ブラッシュ I 220 349; I 388
 ブラトン I 14 16 33 116
 148 183 458 485 511 512.
 フラベヌス・マウルス I 32.
 ブラマン I 583.
 フランケ I 164 167—75 348
 フランケ學院 I 172.
 フリーゼン I 583.
 フリック I 103 315.
 フリッシュアイゼンケーレル I 224
 225 266 285 397 528 553;
 I 126 183—90 214 256—61.
 フリードリッヒ一世 I 164.
 ブリンクマン I 512.
 ブルゲル I 247.
 ブルタルコス I 49 123.
 ブルーノ I 38 40.
 ブルーン I 55.
 フレーベル I 335 346—79.
 I 148.
 プロイエル I 443 444.
 フローテ I 52.
 フロイド I 443—5.

ブロンスキー I 403 405.
 文化 I ヘーニヒスヴァルト 123,
 グリゼバツハ 231; の教育的意
 義 I 130.
 文化科(運動) I 324—7.
 文化學校 I ガウディーク 110,
 ヴィネケン 420—22.
 文化教育學 I 131; シュブラン
 ゲル 168—84, フリッシュアイゼ
 ンケーレル 184—190, リット
 190—204, ケルシェンシュタイネ
 ル 204—220, レーマン 220—
 27.
 文化史的段階 I 240 329 567;
 ツィルレル 57—6.
 文化の繁殖 I シュブランゲル
 171.
 文藝復興 I 35; イタリアの
 42—6, ドイツの 46—7.
 分析教授 I ヘルベルト 411.
 分析法 I コメニウス 146.
 フンボルト I 286—99; I 189
 215.
 ベイル I 139 141.
 ヘギウス I 53.
 ベーク I 233.
 ヘーゲル I 185 196 471—507
 524 555; I 7 8 229.
 ベーコン I 37 39 100 107
 112 115—6 128 129 134
 139 149 154.
 ベスタロッテ I 135 146 151

191 302—46 350 382—5
440 455; I 219 313 452
456; の復興 I 35.
ベスタロッチ派 I 346, 582—3.
ヘッケル I 174.
ヘットネル I 46.
ベッフェルコロン I 54.
ヘッベル I 30.
ベテルス I 329.
ベテルゼン I 146—52 287—8
378 416.
ベトラルカ I 43.
ヘーニヒスヴァルト I 120—26
130.
ベネケ I 555—60 592.
ベネディクッス(聖) I 9.
ヘフディング I 180 192.
ヘマン I 505; I 107.
ベーメン同胞團體 I 138.
ベルグソン I 195.
ヘルゲット I 338 390 398.
ベルグマン I 47—50 128.
ヘルデル I 219 240—49 329;
I 189 324.
ヘルデルリン I 441.
ベルトルート・オット-學校 I 463.
ヘルパッハ I 368—70.
ヘルベルト I 146 147 156
163 170 198 200 379—428
513 553 556 575 592; I
188—9 307 312 313 315
334 357 458; の教育學と二十
世紀の教育 I 30—34.
ヘルベルト派 I 285 329 398

406 412 553 561 562—81;
I 32 222.
ペーレント I 134.
辯證的 I ヘーゲル 473—6;
シュライエルマッヘル 530—31;
I コーン 74—7, リット 77
—82 197, ヘーニヒスヴァルト
123, グリゼベッハ 229—232;
235 236.
辯證的神學 I 228.
辯證法 シュライエルマッヘル 514
—9.
ベンデル I 229 232.
ヘンリー I 302—5.
遍歴學生 I 25.

ホ

ホイジンゲル I 349; I 388.
ホイバウム I 345 509 525
546 552 553; I 35.
ホイムレル I 507.
放任(と指導) I リット 198—
201.
ボエティウス I 12.
ボカチョ I 43.
牧師學校 I 9.
保護 I シュライエルマッヘル
541—2.
ボジョ I 49.
補償 I アドレル 447.
ボスコ・ドン I 356.
ボック I 431.
ボップ I 93.
ボニファキウス I 7.

ホフシュテーター I 327.
ボーベルターク I 285.
ボメラヌス I 87.
ボール I 62.
本山學校 I 9.
本質直観 I 137.

マ

マイノング I 120.
マキアヴェリ I 46.
マギステル I 17.
槇山榮次 I 247.
マーゲル I 578; I 71.
マルクス主義 I 309.
マルテル I 7.

ミ

ミュレル I 281.
ミュンステルベルヒ I 250 295
—6.
未来の自律(生徒の) I コーン
74.
民族 I フィヒテ 468, ヘーゲル
481.

ム

ムルメリウス I 53.

メ

名目論 I 28.
明瞭 判然と明瞭を見よ.
命令の技術 I フェールステル
96.
メスマル I 249

メッセル I 44 130; I 265
470.
メーデ I 286.
メラニヒトン I 55 57 74—81
84 88.

モ

モイマン I 239—46 288.
目的最少限 I 128.
目的の陶冶 I ケルシェンシュタ
イネル 210.
目的の聯關 I デイルタイ 158—9.
模寫(的)教授 表現的教授を見よ.
モナド I 40 163.
モニカ I 51.
モルベルク I 568.
モレシヨット I 2.
モンテッソリ I 365 373 377.
モンテーニュ I 118—26 153
200.
モンロー I 351.

ヤ

約説原理 反復説を見よ.
彌次郎(アンジロー) I 103.
耶蘇會 I 90.
ヤーン I 213 354 583.

ユ

唯物史觀 I 403
唯物主義(教授上) I テルベルト
579; I 195.
唯物論 I 2.
遊戯 I フレーベル 364—6.

- ユスト I 573.
 ユング I 247 323.
- ヨ
- 要素の心理學 I 174 267.
 幼稚園 I フレーベル 371—4.
 抑制 I シュライエル マッヘル 542—4.
 ヨードル I 429.
 ヨハンゼン I 130.
- ラ
- ライ I 240 246—52 451.
 ライエル I 137 167.
 ライブニッツ I 40 129 162—3 164 165 225 226 239 268; I 183.
 ライン I 407 414 420 562 573; I 32 57 67—72 222 308 417 428 450.
 ラウベ I 329.
 ラウメル I 44.
 ラガルデ I 3 10—14.
 ラース I 84.
 ラスキン I 98.
 ラスパー I 591.
 ラテン學校 I コメニウス 149.
 ラテン語學校 I 23.
 ラツァルス I 359.
 ラトゲ I 130 132—7 154; I 313.
 ラムザウエル I 582.
 ラムス I 37.
 ラングベーン I 3 7—9 381.

- ランゲ I 381—2 384 385.
- リ
- 離己 I ローゼンクランツ 484.
 リシュネブスカ I 441.
 リスマン I 580 584. 589; I 34 343 399—401.
 理性點 I シュライエルマッヘル 521.
 理想的教育學 I 186.
 理想的社會的教育學 I 103.
 理想的類型 I シュブランゲル 177.
 リゾルジメント(再興) I 34.
 リーツ I 410—17 422.
 リッケルト I 295 304 313 394.
 リット I 77—83 130 174 190 —204 234 254 327 357.
 リップス I 86 132 219.
 リードマン I 305.
 理念 I ナトルブ 38 114—6.
 理念的抽象 I リット 78.
 理念的統合 I エッゲルスドルフェル 321—2.
 リヒテル I 380.
 リビド I フロイド 443.
 リヒトヴァルク I 382—3 384 386.
 リーブマン I 2.
 リーベルト I 190.
 了解 I デイルタイ と説明 155, と追體驗 161—2, と體驗 163, 文化の了解 164; リット I 81.

- 了解心理學 I 175.
 リール I 120 246.
 リンデ I 34 328—35 337.
 リンドヴァールスキー I 95; I 265.
 倫理化運動 I 92 427.
 倫理的統合 I ヴイルマン 316.
- ル
- 類型 I デイルタイ 162—3, シュテルン 279—80.
 理想的類型 I 177.
 心理的類型 I 279—82.
 教育學の I 185—9.
 陶冶理想の I 227.
 教育學者及び教育者の I シュブランゲル 345, ケルシェンシュダイネル 346—51, デーリング 354 353, フォーヴィンケル 362—5, フリッシャイゼンケーレル 362, ルカとシュナイデル 353, レーマン 367.
 環境の I 373—5.
 類推直観 I ベスタロッタ 323 328.
 ルカ I 363.
 ルソー I 112 121 122 123 124 145 153 161 166 175—208 225 274 317 348 418 434 458 499 512; I 15 344.
 ルーデ I 465.
 ルテル I 9 47 48 52 53 55 61 62—73 75.

- ルネッサンス I 29; 起原 34 特質 35—42.
 ルンク I 335.
- レ
- 歴史的的教育學 I 186.
 歴史的理性の批判 I デイルタイ 153.
 歴史派 I 154.
 レーゲネル I 450.
 レーゼン I 31 70 75 80 118; 185 229 239 268 281 302 345.
 レッティング I 237—40.
 レディ I 410.
 劣等感 I アドレル 446.
 レーマン I 379 425 427; I 55 99 108 184 220—27 255 336 402 434—5.
 聯關(精神的) I デイルタイ 構造聯關 157—9, 目的聯關 159—60.
 教科の I ヴイルマン 311—3.
 聯合的教科 I 312.
 聯想心理學 I 261.
 レンブラント I 9.
- ロ
- ロイヒリン I 54 57 74.
 勞作學校 作業學校を見よ.
 ローゼンクランツ I 472 484 504.
 ロック I 124 126 129 153—61 171 190 193 203 209.

ロツツェ I 562 565; I 294.
ロツホネル I 134—5.
ローデン I 442.
ロートヘーン I 92 102.
ロヒョウ I 584 592.
ロヨーラ I 89—90.
マルレ I 521 553.

論理主義(教育上) リット 193—4. *

ワ

ワリヤーニ I 103.
ワルドウス(教) I 26—7.

—◀終▶—

獨逸教育思想史 上卷

定價 貳百圓

昭和二十二年十月十日初版印刷
昭和二十二年十月十五日初版發行

著者 篠原助市

發行者 矢部良策

東京都中央区日本橋小島町二ノ四

印刷者 鈴木直樹

京都市中京區壬生花井町三

配給元 日本出版配給株式會社

東京都千代田區神田淡路町一ノ九

版元 株式會社 創元社

東京都中央区日本橋小島町二ノ四
電話茅場町一〇六四・四〇八三番
振替口座東京一五六五番
大阪市北区橋上町四五番
電話堀川一〇七四・一七六八番
編輯口座大阪五七〇九九番
會員若野A一一九〇五一



日本寫眞印刷株式會社印刷

H228-16

